

## ミソサザイの舌打ち

辻 憲男 (文学部教授)

薄田泣菫(すすきだきゅうきん)は、井上靖が勤めた大阪毎日新聞学芸部の大先輩である。二十代で一躍名を成した詩人は、同紙に風刺のきいた短い「茶話」を連載した。明治大正のマスコミは、そうした辛口批評を好んで掲げた。その一つ。

白樺派の作家・有島武郎が神戸の女学校で講演をした。生徒にまじって三～四人、アメリカ人の女性宣教師が聴いていた。有島は静かに話した、“昔むかし、ある小学校に信心深い女先生がいました。先生は子供たちに話しました、「みなさんふだんは神様を忘れているでしょう、でももし泳ぎの最中に溺れたら、神様どうかお助け下さいと呼ぶにちがいない」。すると一人の子供がやにわに立って言いました、「先生、わたしなら、きっとアブブブ…と言って沈みます」”

この時、宣教師たちはミソサザイ(鶺鴒)のように口をとがらせて、ち、ち、ち…と鋭い音を立てた。それまでも舌打ちは聞こえていた。講演が終わって、ある日本人が感想を求めると、彼女らは「さあ、日本語でしたからよくはわかりませんでした」と答えた。その人は日本で生まれ育った校長・ミス某であったという(「西洋婦人のお上手」)。

有島の年譜によると、この講演の主旨は“自己を愛すること”。上の例え話はそれである。まもなく評論「惜しみなく愛は奪う」が成った。デモクラシーの世は求道の作家をもてはやした。有島後期の旺盛な文筆活動の始まりであった。



薄田泣菫は長く西宮に住んだ。写真は二テコ池と甲山(かぶとやま)。